

カトリック新聞の第1面の右下に“わすれない”というコーナーがあることをご存知でしょうか？4月28日号は、神戸地区社会活動委員会や“ふっこうのかけ橋”また社会活動センターとも関りが継続している「カリタス南相馬」からの現状を伝える記事が掲載されていました。カリタス南相馬の責任者は Sr.畠中ちあきさん（聖心会）、以前神戸地区にもお出で頂いて福島、特に沿岸部の浜通りについてのお話を伺いましたが、この記事を書かれた副所長の南原摩利さんは南相馬での活動5年目を迎えた方です。変化する状況の中、早期帰還した高齢者の思い等を綴られていましたが、戻った人々が抱える問題、戻れない人々が抱える問題など、それぞれが抱える複雑な問題は残されたままであることが伺えました。特に世間では戻ら（れ）ない人へのバッシングがかなりあり、イジメの問題など深刻さを増しています。記事の中で、「戻る」か「戻らない」かのどちらかを選択することに目が向けられがちであるが、むしろ被災した住民が、それぞれの場で幸せに暮らせるような支援があると締めくくられていたことに共感しました。



またもう一つ、同日付けの同新聞の記事から「希望の牧場・ふくしま」を守り続けている吉沢正巳さんの講演会の記事がありました。当時、福島第1原発から14kmの地点にある浪江町の和牛牧場で働いていた方ですが、爆発後に出された緊急避難指示にも牛を置いて逃げる事が出来ず、食用にはできないため餓死させるか殺処分の道しか残されていなかった牛たち300頭とこの8年を現地で過ごして来た人でした。牛飼いとして、自分には牛たちを処分することは出来ない「最悪なことの中にどんな意味があるか見つけたい」と悩み抜き、今ようやく「絶望の中にこそ希望がある」という答えを見つけれられたようです。

もう一つ「南相馬こどものつばさ」というプロジェクトをご紹介します。このプロジェクトは2011年の原発爆発後に戸外での活動制限を受けた福島の子どもの健康と成長を願い企画実行して来ました。県外での林間・臨海学校の企画を広く募集しており、今年も福岡教区が「博多にきんしゃい」でエントリーしています。

さて、さまざまな福島の今を書きましたが、最後に届いたばかりの「原町教会報」から幸田司教が書かれた文章を一部転載します。「風評を含めて、影響と痛みは今も続いています。地震と津波は過去の出来事になりつつあるかもしれませんが、原発事故の方は今も収束したとは言えません。・・・」

東京オリンピックに向けて傷んだ沿岸部では急ピッチで工事が進み、安全宣言が出されていますが、除染土を詰めたフレコンバッグの山はまだまだ仮置き場に積み上げられたままの状態の人々は暮らしています。原発そのものの在り方を問うこともなく、不利益なことを水に流し、臭い物に蓋をして来た人間のエゴがまだそこには存在しています。原発事故の収束こそが人々の願いであり、未来への希望の兆しだと思います。支援の形はさまざまありますが、今年も下記の予定で従来どおりの“ふっこうのかけ橋”を開催することになりました。

とりもなおさず福島と神戸の子どもの笑顔の交流をめざして。

期間：2019年8月1日（木）～5日（月）

場所：カトリック垂水教会 愛徳姉妹会カナ・ナザレの家 が候補に上がっています。

詳細は後日、各小教区にお知らせ致しますので、ご協力宜しくお願い致します。